



神川町長 櫻澤 晃氏

町長のメッセージ

神川町は、埼玉県の北西部に位置し、^{かながわ}神流川を挟んで群馬県藤岡市と接しています。町の南西部には、晩秋に可憐な花をつける「冬桜」の名所である城峯公園、清流神流川の景勝地「^{さんばせききょう}三波石峡」など美しい水と緑、実り豊かな大地が広がる自然豊かな町です。当町では、「安心して結婚・出産・子育てができるまちづくり」、「将来に不安をもたなくてすむまちづくり」、「健康でこころ豊かなまちづくり」、「隣同士で支えあえる地域づくり」に取り組んでいます。

はじめに

神川町は埼玉県の北西部に位置し、西に清流神流川が流れ、南から中部にかけては秩父山系から連なる城峯山、御嶽山などの山々、北は神流川の形成する扇状地である平地からなる。北は上里町、東は本庄市、南は皆野町、秩父市、西は神流川を挟んで群馬県に接する、南北に細長い県境の町である。

1954年に^{たんしやう}丹荘村と青柳村が合併し神川村となり、1957年に渡瀬村を編入、1987年に町制を施行した。2006年に神泉村と合併し、現在の神川町が誕生した。

町内を国道254号、JR八高線が走り、丹荘駅が町の玄関口となっている。また、近隣には関越自動車道の本庄児玉ICや、上越新幹線の本庄早稲田駅がある。

★長い歴史と豊富な観光資源

神流川流域は有史以前から人々が暮らす豊かな土地であり、当地の遺跡からは1万5千年から2万年前と推定される石器が出土している。古墳時代には大規模な群集墳が造られた。町内で300基が確認され、多くの土器、埴輪、大刀などが出土している。土器は様々な様式や用途のものがあり、埴輪は円筒埴輪をはじめ、巫女や盾持ち人などの人物、馬などの動物、武具などバラエティーに富んでいる。銀をはめ込んで装飾された「^{ぞうがんそうたち}象嵌装大刀」や、「^{ぞう}象嵌装柄頭」など全国的に珍しいものが発見されて

いる。こうした土器など多くの出土品は、中央公民館および多目的交流施設の文化財展示室で見ることができる。

また、当地は平安後期から鎌倉時代に台頭した武蔵七党の一つ丹党安保氏の拠点であった。町内にあるJR八高線丹荘駅の名前はこの丹党に由来する。明治以降は養蚕や製糸により栄えた。

長い歴史と豊かな自然に恵まれた神川町には、多くの歴史的資産、観光資源がある。町の中央にある^{かなさな}金鑽神社は日本武尊が東征の際に創建したと伝えられる。拝殿の奥にある^{みむろがたけ}御室ヶ嶽一帯をご神体として祀っており本殿がない。こうした拝殿のみで神体山を祀る古い祭祀形態をとどめている神社は、長野県の諏訪大社と奈良県の大神神社と合わせて3社だけといわれている。金鑽神社の近く、金鑽大師と呼ばれる大光普照寺は、聖徳太子の創建、舒明天皇の勅願寺と伝えられる。中世から江戸時代には僧



金鑽神社多宝塔

神川町概要

人口(2023年1月1日現在)	13,122人
世帯数(同上)	5,881世帯
平均年齢(2022年1月1日現在)	50.1歳
面積	47.40km ²
製造業事業所数(経済センサス)	36所
製造品出荷額等(同上)	700.8億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	74店
商品販売額(同上)	154.2億円
舗装率	49.1%

資料:「令和3年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- JR八高線 丹荘駅
- 関越自動車道 本庄児玉ICから町役場まで約8km

侶を養成する学問所として栄えた。

町の南にある城峯公園は冬桜で有名。10月下旬からライトアップが行われ、深紅の紅葉と淡いピンクの桜による幻想的な光景を見ることができる。下久保ダムから下流にかけての約1.3kmの三波石峡は、国の名勝・天然記念物に指定されている。三波石の巨岩や奇岩と周囲の樹木が織りなす美しい景観は自然が作り出した芸術と呼ばれている。

特産品「神川の梨」

神川町では明治時代から梨の栽培が行われており、埼玉県で最も古く伝統のある梨産地の一つである。良質な水と土壌、高い栽培技術により、「神川の梨」は甘くてみずみずしいと評判である。現在40軒を超える生産者が丹精を込めて栽培をしている。多くの生産者は自ら直売所を開設しており、道路沿いに直売所が並ぶ光景は「梨街道」といわれ、町の風物詩となっている。

特産品の梨であるが、近年では生産者の高齢化や後継者不足が課題となっている。町では、梨生産で新規就農を目指し、町を活性化するための活動ができる人を地域おこし協力隊(特定農業サポーター)として募集している。この取り組みには成果が出ており、地域おこし協力隊として、2017年から梨農家で3年間研修を行った隊員が、2020年に梨農家の経営を引き継いだ。世襲でない第三者が農業経営を引き継ぐ新たな継承の形が実現した。

新庁舎オープン

2019年、新庁舎がオープンした(表紙写真)。旧庁舎は建設から40年以上が経過し、雨漏りや外壁の劣化など多くの問題を抱えていた。新庁舎建設に当たっては、「防災拠点としての機能」、「高度情報化への対応」、「環境にやさしい庁舎」、「ユニバーサルデザインの導入」を基本テーマとした。庁舎内の町民ホールをはじめ床材には町産材のヒノキを活用し、テーブルや椅子、記載台なども、町産材を使用した。木のぬくもりを感じられる、誰もが利用しやすい庁舎となっている。

また、閉校した神泉中学校を再利用した、神川町多目的交流施設の敷地内で、「新神泉総合支所」の整備が進んでいる。同施設もコンパクトでぬくもりがあり、子どもや高齢者も安心して利用できる施設として、2023年4月の開所を予定している。

(吉嶺暢嗣)



甘くてみずみずしい神川の梨